

院に入院したが養生も出来ないもので、長くないで退院した。

部隊に追及したが、タトンに集結させられていた。そこでオランダ軍の労役を十か月もやらされて、昭和二十一年六月三十日頃だったか、モールメンに集められ、乗船して七月十四日大竹港に到着して復員した。

よくぞ生きて還ったビルマの初年兵

長崎県 荒川 猛

長崎県 増田 秀行

―島原市同郷の荒川さんと増田さんは同年兵で、共にビルマの菊兵团で戦った戦友ですので、対談というより交互にお話をして頂きたい。

〔荒川〕

私は昭和十八年四月十日、現役兵として大村の西部第四十七部隊に入隊した。家族は両親、祖父母が健在だった。兄は昭和十四年三月十日、大村の陸軍陸院で病死し

ました。当時は、若者はたくさん出征していたから、家でも入営は当然と思っていたでしょう。

三か月間教育を受けて、一期の検閲後の七月二十七日の深夜に、門司を出航しました。

南方の菊部隊への転属で、シンガポールまでは無傷だった。途中、台湾の馬公に二、三日寄港したが、上陸してサイゴンで糧秣受領も乗船したままでした。昭南港（シンガポール）に着いたのは九月ですから約四十日かかった。

南兵舎に一週間休息待機してビルマへ、モールで戦時編成をしました。

〔増田〕

我々は最初から、南方派遣菊八九〇二部隊への転属要員と軍隊手帳に書いてあった。

モールに着いたのが十月頃で、そこに大隊本部があつて編成し、荒川君は第二中隊、私は第六中隊だった。ミートキーナに汽車で来て、雲南に近いところでフーコン作戦に参加、自分達が着いた時には、すでに戦闘は始まっていた。その時はもう敵に押されていた。英軍と中

国軍だったが装備はよかった。

米軍が輸送機で弾薬や食糧を、卵型にボンボンと落とす。英軍は輸送車のうえでパンを焼いたりして、食糧はよかった。日本軍は防空壕のなかで、煙の出ないようにに飯ごう炊さんだ。

―着いたとたんに、敵に押されているのでは大変だったでしょう。そのなかでもつらかったことは

〔荒川〕

敵の兵器は自動小銃、こちらは三八式歩兵銃だ。装備が全然違う。ミートキーナから最前線のフーコンまで、昼夜兼行の行軍だった。

〔増田〕

十八年十月から十九年、二十年と、二か年半風呂にもはいらなかった。頭をなざればシラミが落ちる。不潔のため、大半は皮膚病、マラリヤ、脚気、食料難で、大半は亡くなった。

主食は現地で徴達したビルマ米。菜はなく、岩塩をなめるだけ。一度飯ごう炊いて、それが一日間の食料、水もなくて洗えない。干ばつときは、象の足あとにした

まった水で米をとき飯をたいた。テントを張るまもないから野宿同様、そこに二、三日もおれば、繰り返し空襲される。撤退、撤退です。

〔荒川〕

ロッキードP 38が来て爆弾を落す。十九年以降はあわれなものだった。高射砲はあっても弾がとどかぬ。撃てばぎやくに陣地が攻撃される。高射砲あってもなんにもならん。

〔増田〕

私が負傷したのは、マインカン六キロの地点、北ビルマの戦闘中、迫撃砲破片で盲貫創。

〔荒川〕

私は十八年十月、追撃中に盲腸で兵站病院（モールメン）に入院したが、中隊と離れての入院で助かったわけ。病院にいたら、第一線から戦友が負傷してたくさんさがって来た。

〔増田〕

戦局がだんだん悪くなり、つぎつぎと撤退し、ラングリーンからタイのバンコックの第十六陸軍病院―南方軍

第三陸軍病院―シンガポールの第一陸軍病院へとさがった時は十九年七月ころだったか。もうそのころは、一緒にさがった者や仲間ほとんど死んでいる。

いま第五十五連隊の合同慰霊祭をやっているが、我々が一番若い。先輩は十二、三人ぐらいしかいない。大部分は死んでいる。

〔荒川〕

内地から四十人行った同年兵もわずかしか生きて帰っていない。ほとんどが戦死・戦病死だった。久留米師団の出身の第十八(菊)、第五十六(竜)はフーコン作戦だったので。

〔増田〕

インパールは第三十三(弓)、第十五(祭)、第三十一(烈)、第五十五(壮)、第五十六(安)などだったと記憶しているが。

―進撃の時はつらくても、つらいと感じないが、負け戦ではつらさがとくにひどいが、個人としてとくにつらかったことは。

〔増田〕

私は軽機関銃の射手だったから、いつも第一線だが、野宿の飯なしで撤退の行軍だ。

〔荒川〕

私は擲弾筒の弾薬手なので、弾薬が腰にくいこんでの行軍、行軍だ。それに食べるものもなくて、よく助かったものだ。マラリヤにかかって高熱を出して、栄養失調で脚気になる。歩こうと思っても歩けない。落伍すれば死んでしまう。

〔増田〕

北ビルマの山のなかは夜露がひどく、雨のようにポトポトと体にかかる。そのなかで野宿していれば、山ひるが巻きやはんのなかへはいつて来て血を吸う。休むことも眠ることもできない。それに行軍、遅れたらやられてしまう。

〔荒川〕

乾期と雨期の差はひどかった。半年半年でだ。終戦になって、シタン河のそばの捕虜収容所において、黒人二人の監視のもとで、英国の糧秣の運搬をやった。その時すこしもらって帰り、自分たちの宿舎(民家)で外国給

与だ。

だから、負けてから給与がよくなった。戦争中は食料
なしかつたから。我々は、ラングーンの飛行場のところ
から汽車で港へ出て、二十一年五月二十八日、田辺港へ
上陸して、同時に田辺の分院に入院して四日間。後遺症
で十分首がまがらぬ。機能障害が残ったが復員した。

実家では、兄が戦死していたので、あまり甘えて療養
はしていられず、お陰で二十七年になって日本舗道に入
社した。

〔荒川〕

私は内地に帰ったが四〇五年マラリヤで苦勞した。体
がふるえて止まらない。高い熱がつづいて悩まされた。
三日熱だからよかったが、熱帯熱だったら死んだらう。
その後、親のやっていた船大工を引きつづいてやって
る。

〔増田〕

歩兵は行軍がひどい。屋根のしたで寝られず野宿だ
し、入浴もない。お陰で水虫をもらって来た。あの苦勞
は自分でやった者でなければわからない。同僚がなく

なったのでなにもいえないが、生きていればこそその今日
だが、やはりひどさは忘れられないし、報いはないの今
日だ。

末期的ビルマ作戦死境を越えて

新潟県 五十嵐 新一郎

私は大正二年九月十六日生まれなので、昭和八年徴集
です。当時は軍縮時代だったから身長が少し足りない短
尺甲種ということで第二補充兵でした。しかし、十八年
六月五日召集され、第二師団の補充隊輜重兵第四二連隊
第一中隊に編入され、王城寺原の練兵場で、四か月間の
教育を受けました。

九月二日、門司出帆、仏印に上陸、飛行場近くで約一
か月待機、船で昭南島へ行って、ガダルカナル引き揚げ
の第二師団（勇兵团）のくるのを待つて補充になった。

一年配で家族の方々を置いて、いよいよビルマ戦線に
ぶちこまれたわけです。